

終わらない、そして僕は英雄でもない。

來夢檸檬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、僕と一冊の本の話。

なんてことは無い、いつもと同じように買った本が原因で、あんなことになるなんて。

やはり、僕は怪異のようなものを引きずり込んでしまいうらしい。

困った体質だが、これからも付き合い続けるしかないのだ。

警察、消防、医療機関から収集された情報からSCP-268-JP-Aの条件を満たすと判断された人物はリストアップされ、その動向が監視されます。該当人物に不審な失踪などが見られた場合、財団エージェントが調査とSCP-268-JPの回収を行い、目撃者が存在した場合には記憶処理を施しカバーストーリーを適用してください

い。SCP—268—JPAの条件を満たすレベル以上の財団職員に対してはその職務・権限に関わらず当該オブジェクトの情報が開示され、特性の把握と遭遇時の報告が義務付けられます。

目次

終わらない、そして僕は英雄でもない。

1

終わらない、そして僕は英雄でもない。

目が覚めたのはいつもの変わらぬ、僕の部屋のベッドだった。

見知った天井を見上げ、身体を起こす。何故、こんな所で目覚めたのか。

「きゃあああああつ!!!」

突然、階下で彼女の…忍の悲鳴が聞こえた。

急いで階段を降りる。

そこに居たのは、衣服を剥がれ、今まさに襲われそうになっている忍と、包丁を持つ

た覆面の男。

「何してんだ!!!」

咄嗟に体が動く。

忍の上に覆いかぶさった男を突き飛ばし、忍を助け出す。

…痛い。

「お主…お腹……………」

忍の言葉に、僕は自分の腹を見る。

そこには、深深と突き刺さった包丁。

そこで、僕の意識は途切れた。

「第1章：強漢から少女を救った、勇ましい男の話」

気付いたら、僕は高校の前にいた。

いつも通り、制服を着て。

おかしい。確かに僕の腹には、包丁が突き刺さった感覚がある。

「お主、どうかしたかの？」

忍の言葉に、僕は我に返る。

ああ、きっと夢だったのだろう。

そう考えて、僕はひたぎと一緒に、高校前の横断歩道を渡る。

「きゃああああっつっつ!!」

突如響く悲鳴。

ふと隣を見ると、スピードを緩めずに突っ込んでくる大型トラック。

僕は咄嗟に忍を突き飛ばした。

身体中に巡る鈍痛。

そこで、僕の意識は途切れた。

「第2章：暴走トラックから少女を救った、勇敢な男の話」

目が覚めると、橋の上にあった。

……ああやはり、体には鈍痛が残っている。

やはり、夢じゃない。

「お主、ボーつとしていているがどうかしたのか？」

隣には忍がいる。

さっきの記憶、そして、その前の記憶…。

明らかに、何かがおかしい。

そんな事を考えていた時…。

ミシ…………。

足元から嫌な音が聞こえた。

「忍っ!!!」

僕は咄嗟に忍を突き飛ばす。

直後、橋が音を立てて崩れ落ちる。

老朽化が原因だろうか、忍は何とか巻き込まれずに済んだようだ。

……落下していく中、僕は考える。

これは明らかに……。

怪異の仕業だ。

「第3章：崩れ落ちる橋から少女を救った、勇敢な男の話」

気が付くと、僕は神社の境内にいた。

太陽の木漏れ日が降り注ぐ境内。

「お主、早く行くぞ」

前を歩く忍が僕を急かす。

きつと、また……。

「何を儂の顔をじつと見ておる……あつ……」

僕の方を見ながら歩く忍が、階段から足を踏みはずす。

僕は黙って、忍の手を掴み引き寄せる。

その反動で、僕の体は階段の方に投げ出される。

何が起きている。こんな事、有り得るのか？

……いや、それ以前に、何かがおかしい。

そんな思考を巡らせながら、僕は階段の下へと落下していった。

「第4章：階段から落下しかけた少女を救った、勇敢な男の話」

意識がはつきりした時、僕は大きな虎の前にいた。

「思い出せ。」

虎は僕に言う。

「貴様の命を捧げてこの娘を救うか、娘の命を捧げて貴様が助かるか…選べ」

虎は僕に言う。

隣には、ボロボロになって倒れた忍がいる。

「なあ…少しだけ話をしないか」

僕は虎に向かって言う。

「時間はない。ほんの少しだけだ」

虎は言う。

「お前はなんで存在しているんだ？お前は消えたはずだろう。」

僕は虎に向かって言う。正確には、消えたという訳では無いのだが…まあ、消えたという表現でいいだろう。

「ああ、確かにな。だが、この場所だからこそ、存在できている。さあ選べ、もう待てないようだ。最後にもう一度言う、思い出せ。それが、お前の助かる道だ。」

虎は僕に言う。僕は迷わず、忍の前に立った。

虎の……苛虎の牙が僕を喰らう。そこで、僕の意識は途切れた。

「第5章：少女の命を選び自らの命を捧げた男の話」

気が付くと、僕は街中を歩いていた。

隣には忍がいる。

「なあ忍」

時間はないかもしれない。だから僕は忍に問いかける」

「なんじゃ？」

「お前、今何歳だ？」

照りつける太陽の下、忍は立ち止まり、首を傾げる。

「そんな事、レディに聞くものでは無いぞ？」

「ああ、けど答えてくれ。」

「……………19歳じゃが？」

ああ、なるほど。これが1つ目の違和感か。

ガコンツッ！

頭上で大きな音がする。

「もう1つ聞かせてくれ」

「お主！そんなこと言っている場合では！」

なるほど、これが2つ目の違和感だ。

そしてもうひとつ…。

僕は、忍を突き飛ばしながら聞く。

「忍、お前、帽子はどうした？」

崩れ落ちてきた鉄骨に潰されながら、僕はその答えを聞くことができなかった。

「第6章：落ちてきた鉄骨から少女を救った、勇敢な男の話」

気づくと、僕は廃墟の中にいた。

目の前には、見知った童女と、もう1人、専門家の姿。

「おどれ、いい加減気付きいや。」

専門家…影縫余弦は僕に言う。

「気付いてるんですよ。もう。ただ、僕にはその決断ができないだけです。」
「ほんなら、その答え合わせを聞こうか？」

影縫さんは僕に問う。

「僕の隣にいる忍は、忍じゃない。…いや、忍であることに間違いなんでしょうけれど。けれど、忍は外を出歩く時、絶対帽子を忘れない。それに、19歳なんて、いくら年齢にサバを読んでもそんな答え方はしない。何より、僕の知る忍は、こんなに大きくない。」

僕は、隣にいる忍を見る。春休みに見た、成長した忍の姿。けれど、この姿はありえないのだ。

「そして何より、忍が物理的な死を恐れる事はありえない。」

そう、隣にいる忍は、明らかに人間なのだ。吸血鬼であるはずの忍野忍が、死を恐れて叫ぶはずがない。鉄骨が落ちてきても、悲鳴を出すなど考えられないのだ。

「それで？ほんなら、おどれが出す答えはなんや？」

影縫さんは僕に問う。

「…斧乃木ちゃん。僕と忍を、一緒に吹き飛ばしてくれ」

「了解。例外の方が多い規則、ボクはキメ顔でそう言った。」

斧乃木ちゃんの巨大化した指が、僕と忍を同時に吹き飛ばす。

四肢がぐちゃぐちゃにねじ曲がり、息絶えた忍を見ながら、僕の意識もまた、暗闇に沈んでいった。

「最終章：少女と共に死を選んだ、愚かな男の末路」

目が覚めると、僕は自宅のベッドの上にいた。

傍には、ベッドに座る忍の姿と、もう一人…。

「やあやあ阿良々木君、ようやく戻ってきたね」

室内なのに帽子を被り、飄々とした雰囲気僕にそう言う彼女は、専門家の元締め、臥煙伊豆湖。

「……………それが…」

机の上には一冊の本。そう、僕が買ってきたあの本に触れた瞬間、僕の意識は闇に落ちたのだ。

「いやあ、無理やりな結論だね。けれど、合理的だ。合理的で、君らしい。忍野忍が生きている限り、阿良々木暦も存在する。そして、不死である忍野忍が死なない限り、阿良々木暦もまた、消失したところで復活する…。流石にこの本でも、忍野忍…キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードが『普通の少女』では無いとは思わなかつ

たらしいね」

「どうやらあの本もまた、怪異に似た性質を持ったものだったらしい。臥煙さんは、この本は然るべき場所に渡すと言っていた。

「にしても…はっはー、面白いね、阿良々木君。彼らもこの本の犠牲者を無くすために尽力しているみたいだけど、まさかこんな形も存在するなんてねえ…いやはや、驚いたよ」
臥煙さんはあっけらかんと笑いながら僕に言う。…ああ、確かにそうかもしれない。僕がその本を手にしたのも、それが理由なのだから。

僕がその本を取った理由。ただの黒い表紙の本。内容は見ずに、手に取ったその本。なぜ買ったか、その理由は…。

そう、極めて単純。

僕が本命で買った少女系の本を、他の人の目から隠すためなのだから。

この後、僕が臥煙さんに白い目で見られ、忍に吸血鬼パンチを喰らった後ゴールド
チヨコレートを3つ買わされたことは言うまでもない。